

7 月第 3 週の礼拝説教

■日 時：2024 年 7 月 21 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 10 主日礼拝

■説 教： 保科けい子牧師

■聖 書：新約：ヨハネによる福音書 6 章 22 節～27 節（新約 p175）

■説教題：「永遠の命に至る食べ物」

■讃美歌：140 「み神のすまいは 何と素晴らしい。」

467 「われらを導く 贖いの主よ、」

本日の聖書箇所、ヨハネによる福音書 6 章 22 節の書き出しに「その翌日」とあります。直前の 6 章の 1 節から 21 節までに記されている、主イエスが二つの奇跡をなされたことを受けて、その翌日のことが語られていると単純に読んでしまいがちなところですが。しかし、ヨハネによる福音書では、日にちを表す言葉、例えば、本日の箇所のような「その翌日」とかほかの箇所に出てくる「二日後」「三日目」などから始まる箇所には、大事な事柄が具体的に記されていると言われています。ですから、そのような思いで、22 節以下を読み進めたいと思います。22 節、24 節で描かれている「群衆」とは、役人の息子をいやす言葉を語られた場面に居合わせた人々であり、ベトザタの池で安息日に病人をいやした場面を見ていた人々でした。それらの奇跡の出来事によって非常に驚いたので、今の言葉でいえば主イエスの追っかけをしているのです。そのような人々が「大勢の群衆」と描写されるほどに増えていきました。彼らは主イエスの後を追ってやって来て、食事時になりました。しかし、あまりの人数だったために、弟子たちには食料の調達が不可能なことがすぐわかりました。そこで、主イエスはその場にいた少年の持っていた大麦のパン五つと魚二匹を受け取って、感謝の祈りを唱えて分け与えられました。男たちが「五千人」座っていたと記されていますが、その場には女性も子どももいたはずですから、食べものに与かったのは膨大な人数だったはずですが。そのような中で、皆が満腹し残ったパン屑が 12 籠いっぱいになったという奇跡が起こったのです。14 節には、「そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、『まさにこの人こそ、世に来られる預言者である』と言った。」と記されています。人々は、主イエスのなさる病人のいやしなどを見て、この人物はただものではないと思ったので追いかけてきたのです。そのことが、食べ物を通してさらに確かな形で大勢の人々に知らされました。ですから、人々は主イエスを「王にするために連れて行こうと」したのです。しかし、主イエスはそれらの人々を避けるようにして、弟子たちと共に小舟で移動されています。

先ほど確認した 22 節の「その翌日」から始まる 24 節までの描写には、主イエスを何とかして探し出し、自分たちと共に行動してもらおうと願う群衆たちの必死の様子が鮮明に描かれています。その結果、とうとう主イエスはカファルナウムで彼らに見つかってしまいました。25 節で「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」という彼らの問いかけに、ヨハネによる福音書の著者は、主イエスによる救いを求めてその後を追いかけていく者たちが共通して抱く問い、主イエスはいつ、どのようにしてここに来て下さるのか、主イエスによる救いとはどのようなものでありそれはどのようにして与えられるのか、という問いを重ねているのです。しかし、大勢の群衆の見ていたのは、眼前

で行われたいやしの出来事であり、自分たちを満腹にしてくれた不思議な出来事でした。だからこそ、自分たちの王にするための「ラビ」として、「主」ではなく「ラビ」と呼びかけているのです。26節で、主イエスはこうお答えになりました。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べた満腹したからだ」。「はっきり言うておく」という言葉については、以前にもお話ししていますが、福音書では特に、主イエスが大切なことを宣言なさる時に使われています。彼らは五千人を満腹にするという主イエスのなされた奇跡を見たから、主イエスの後を追って来たはずですが、しかし、主イエスはそのようには受け止めておられません。そのように見てくると、ヨハネによる福音書で語られている、主イエスの考えておられる「しるし」と、主イエスを追いかけた群衆の考えている「しるし」とがなんとなく異なっているのではないかと気づかされます。そして、それはまた、私たちが聖書を読んで理解したとと思っていることと、主イエスが私たちに語っておられることが時には異なってしまう、ということに気づかされることでもあります。

ヨハネによる福音書では、主イエスのなされた奇跡が「しるし」と呼ばれるのは、その奇跡が主イエスこそが父なる神から使わされた独り子なる神であられることとしるしとなるからです。奇跡を見たりあるいは体験したりした人々が、主イエスこそ神の子であり救い主であるという信仰を持つようになることによってこそ、その奇跡は「しるし」として受け止められたことになるのです。けれどもこの群衆にとっては、「しるし」は主イエスを神の子と信じて従っていく、という信仰をもたらすものにはなっていないのです。それを主イエスは鋭く見抜いておられます。

このことを指摘なされた主イエスは、続く 27 節で、本日の箇所を中心となる教えをお語りになりました。「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである」。言い換えれば、「あなたがたが求めているのは『朽ちる食べ物』だ。しかし私があなたがたに与えようとしているのは、『朽ちない食べ物』、すなわち、『いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物』なのだ、それをこそ求めなさい。」と主イエスは言われたのです。このようにして、ヨハネによる福音書第 6 章の中心となる主題が示されました。27 節でも語られている「永遠の命」という言葉は、ヨハネによる福音書では 17 回用いられていると言われています。その最初は 3 章の 15 節ですが、いつも聖餐式の時にお読みしている 3 章 16 節が本日の箇所と深くつながっていると思います。それは、27 節の後半に語られている「父である神が、人の子を認証されたからである」というみ言葉が、すでに「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」という分かりやすい言葉によって語られているからです。私たちの信仰、それは私たちが滅びという暗い闇から光ある救いへと導いてくれる命綱でもあるのです。

27 節の「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」というみ言葉を読んだとき、2020 年 8 月 2 日に当時仕えていた福島市の教会の主日礼拝で、日本基督教団の聖書日課によって本日と同じ聖書箇所を取り上げていたことを思

い出しました。前日の2020年8月1日(土)の朝日新聞で、池澤夏樹という作家が「また会う日まで」という作品を連載し始めています。その日は「終わりの思い1」という小題がついている1回目でした。その文に心が動かされたのでしょう。書き出しの文章のメモが取ってありました。

“わたしのこの世での日々はまもなく終わろうとしている。

それをわたしは受け入れる。

主の御許(みもと)へ旅立つ。

この世に残す思いはない。

言うまでもなく、主はわたしの五十四年の生涯のことをすべて知っておられる。それでもわたしは主の前に立った時に自分が生きた毎日毎月毎年をきちんと報告できるよう生涯を整理しておかなければならないと思う。それはまたわたし自身のためでもある。

人はみな草のごとく、

その光栄はみな草の花の如し、

草は枯れ、花は落つ。

わたしという草はそれでもいくつかの花を咲かせることができた。わたしは枯れ、わたしの花は散る。「されど主の御言は永遠に保つなり」と聖ペテロは言われた。聖ペテロ、その名はそのまま岩の意であり、しっかりとした教会の礎石である。幸いわたしはこの生涯で咲かせたつましい何輪かの花を手にして主の前に立てる。自分に信仰があってよかったと、最後を前にしてわたしはしみじみと思う。信仰なくして生きることの不安をわたしは想像できない。それはそのまま暗い闇を覗くようなことではないのか。”

最近、信仰をもって歩まれた何人かの方々の生涯の終わりの様子を伝え聞きました。どの方も「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」という主イエスのみ言葉を実践するような生涯の歩みだったと確信しています。皆様方もまた、そのような後ろ姿を思い出す方々をお持ちなのではないかと思えます。そして、「これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」というみ言葉に触れるとき、ご自身がお架かりになる重い十字架を血の汗を滴らせながら担って歩まれる主イエスの姿を、いつの間にか思い出しています。